教育実習ノート

◆YさんからK先生へ

○月○日　　年少もも組

先生方が、工事中の園舎から、建材の入ったダンボール箱を沢山運んでくる。子ども達は早速、家をつくろうとガムテープでつないだり、待ち切れなくて「はやく、はやく」とせがんだり、「鋏が切れないの」と言うと、けいすけちゃんが、自分のを貸してくれた。子ども達より、いつの間にか楽しんでつくっている自分に気づく。やがて完成、定員四名の小さなお城。――人気が殺到して、体を小さくして入る。明日はこの回りを塗ろう、とかもっと広くしよう、と話している。どんなふうに発展していくか楽しみだ。こうじちゃん達は、この箱でロボットをつくって、と言う。手と顔がでるこういうのがいい、と、説明する、なおちゃん、まきちゃんもつくってと言ってくる。夢中になってつくるが、Y先生のように上手にはいかない。幼稚園の先生って想像が創造につながらなければいけないのだなと思う。

◆K先生からYさんへ

○子どもから、創って欲しい、描いて欲しいと言ってきたときは、その意志にそうように創ってあげたいものです。けれど、子どものはっきりした意志がないのに、先生一人でやってしまうのは考えものです。先生は子どもの創意工夫に従って、子どものあとから創作できる人でなければいけません。

◆YさんからK先生へ

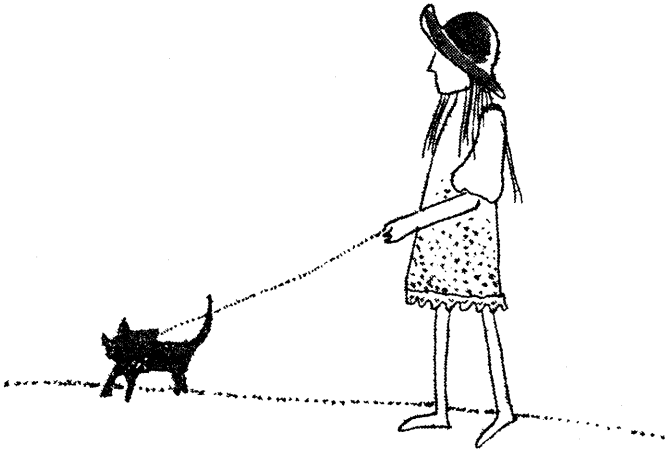
○月○日

桜・桐・ポプラなどの落葉を集めて焚火をする。その回りで手をつないで「焚火」のリズムをする。ともおちゃんも初めは入らなかったが、まざりたいような表情だったので、誘うとすぐに仲間に入る。「あたろうか……」のところで火の傍によると砂をかける。「火が消えちゃうわよ」と言うと、「僕は、けむいのを防ごうとしているんです」と言う。O先生が、やさしく抱っこして膝にのせて、弱まる火を一緒に見ている。

午後からみどり組の部屋で、みんながお別れに、「仲良し蝶」をして下さる。みさ子ちゃんの大きな声、たかちゃんもけいちゃんも一生懸命に太陽になってやっている。私の為に心をこめて演じている。ピアノを弾いているK先生の目も潤んでいる。音楽劇が終ってから、みんなが私のところへ来て、「どうして泣いているの」、泣いたらはずかしいよ」と言ってくれる。その時、たかちゃんが、だまって私のぬれている頬を手でぬぐってくれた。急いで顔を洗ってバスを待っている子ども達のところへ行く。いさむちゃんとまおちゃんが、「先生泣いたでしょう」と声をかけてくる。なんと言おうか、と思っている私に、まおちゃんが「先生、うれしかったから泣いたんでしょ」と言う。私の涙がどういうものであるか、ちゃんとわかって見ていたんだ。お世話になりました、やさしい心をありがとう。

◆K先生からYさんへ

○ともおちゃんの場合、(他にもそういう例がありますが) 何度も注意すると、かえってその中に入っていってしまい、ぬけられなくなってしまいます。理由があってのことですし、理解できなくても気分を変えてあげることです。けむいからといってその場から連れてってしまうのではなくて、

せっかく友達の輪の中に近づいてきたのですから、この心の動きを大切にしたいと思います。子どもは誰も、気分転換の名人です。

「仲良し蝶」は、この幼稚園のモットーです。いいえ、世界中の幼児教育者の目標でしょう。年長組は、四月、五月、六月、のお誕生会でするうちに、それは劇ではなく、本物のみんなの「ことば」になっていきます。部屋の中だけでなく、お庭でもやっています。年少が見ていて、やがて羽根をつけて飛びたちます。沢山の仲良し蝶が生まれて、「とうとうみんな一緒にとめてもらえるところはないのねえ」と言って、雨に濡れて臥せていきます。木の陰から太陽がでてきます。これは男の子のひっぱりだこの役です。十人も太陽がいるときがあります。同じ色の蝶しか休ませてあげない。と言う花の役は人気がありませんが、「共に生きる」ということが、すっかり覚えてしまった「せりふ」からも実感として、一人一人の心の中に絶えぬ灯として燃えていくことと信じています。